

苗穂聖ロイヤル歌劇団 6th

夜明け前

作・演出 川尻恵太

2010年8月27日～31日

演劇専用小劇場 BLOCH

■青山君の深夜

客入れ

M-O上がっていく

暗転

青山ノートパソコン開く

ヘッドフォンをしている

ME ワッチュアネーム

青山 「深夜二時、夜中続行中。ラジオのオープニングテーマはいつもこの曲」

音楽小さくなり、DJブースに明り。

DJ 「聞いていただいたのは、ザ・シルエットでワッチュアネーム。それでは、今日もDJタッキーの『ミッドナイトラブシャワー』、夜明けまでしばしお付き合いください」

2人 「この曲には思い出がある」

青山 「どんな思い出かは良く覚えていない」

DJ 「私はよく覚えてる」

青山 「あ、スーパーの海鮮コーナーで流れてた」

DJ 「ちがう」

青山 「違うな、それは、さかな♪さかな♪さかな～♪だ」

DJ 「懐かしいな」

青山 「悲しみとよろ～こび～♪だ」

DJ 「歌詞違う！」

青山 「あー駄目だ、絶望的にももの覚えが悪い。今まで出会った大半の人間が頭の中でのっぺらぼうで、名前もきつとでたらめだ。単純に俺がバカとかそういう問題ではなく、不遇の高校時代は、とあるきっかけでいとも簡単に記憶が吹っ飛んだ。故に、覚えてる名前と言え、お尻触り過ぎ新之助と」

DJ 「いない」

青山 「学年一の秀才、脇の匂いドリアン金太郎」

D J 「そんな人いない」
青山 「あと・・・高槻杏」
D J 「覚えてるじゃん」

舞台上に映像

高槻杏の名前を検索する。

検索結果、一番上に『高槻杏のチャリ日記』

青山 「大人になってから何度、この名前を検索しただろうか？」
D J 「ラジオネーム、お尻触り過ぎ新之助。みなさんもあると思いますが、僕は初恋の人の名前をググる事が良くあります、先日とうとう、それらしき女の子のブログを発見！！開いたら、ブログタイトルが結婚しましたー！でした」
青山 「幸か不幸か、本人が引っ掛かった事は無い。いつも一番上に出てくるのはこの」

映像 ブログの顔写真アップ（自転車の顔アップ）

自転車男、舞台上に入って来る。自転車を漕いでいる。

青山 「なんとも言えない顔の男だ」
自転車男 「なんとも言えなくないわ！！イケメンだわ」
青山 「言い過ぎだわ」
自転 「言い過ぎだわ」
青山 「ラジオ」
D J 「ラジオ」
青山 「ブログ」
自転 「ブログ」
青山 「これが俺の深夜の日課だ。文字を目に当てスクロール」
自転 「文字を目に当てスクロール」
青山 「初恋の人と同姓同名の」
D J 「高槻杏」
自転 「性別、男」
青山 「こいつは自転車で旅をしているらしい」
自転 「8月1日 今日も俺は旅の途中」
青山 「逃げているのだ」
自転 「そして、次の目的地に向かっている」

青山 「昨日のターゲットは」
自転 「思ったよりも太った男で」
青山 「皮膚に油が浮いていた」
自転 「俺は思った」
青山 「多分こいつの滑り台半端ねえ」
自転 「音はツルン！！」
青山 「ツルン！」
自転 「13人目だった」
青山 「残るは7人。夏が終わるまでに。そして出来れば」
自転 「夜中の内に」

自転車男、首にかけているヘッドフォンをする。

ME

DJ 「ラジオネーム、脇の匂いドリアン金太郎。いつもDJタツキーの恋愛相談楽しく聞いてます」

SE 車のクラクション。車が通り過ぎる。

自転 「ヘッドフォン運転は危険だ」
DJ 「DJタツキーの初恋の話を教えてください。という事なんです。ん～、どうしようかな～はずかしいな～、う～ん、どうしようかな～。う～ん、あ、じゃあ、えっと、う～ん、なんだっけなあ～どっから話せばいいのやら。あ、じゃああそこから、あ、でもなあ～あそこだと、逆に」
青山 「はやく話せや！！」
DJ 「えーと、高校の時なんですけど。A君という男の子がいて、決して目立つタイプではなくて」

学生時代の青山（以下、あおやま）出てくる。

DJ 「みんなからはチクリのA君って呼ばれてた」
あおやま 「チクってねーよ！！なあ？」
青山 「え？俺？」
あお 「チクってねーよ！なあ！」
青山 「お、おお」

あお 「パン食べる？」

あおやま、きったねーパンをポケットから出す

青山 「きったね」

あお 「汚れパン」

青山 「なんだそれ」

あお 「汚れてんの！」

青山 「食えねえだろそれ」

あお 「食べるわい、臭いし不味いし毒だけど」

青山 「駄目だろそれ」

D J 「噂だった。A君がB君がタバコ吸ってるって先生にチクったって」

あお 「ちげーんだよちげーんだよ、たまたま、馬場がタバコ吸ってるところに
出食わして、お、おお、吸う？いや、いらぬ。みたいな会話して、
その直後にバレたっただけだよ？なあ」

青山 「そうだ、そうだった」

あお 「なんだよ、みんな無視しやがってよ」

D J 「それからA君は不遇の高校時代を過ごす事になるのです」

青山 「だからあんまり覚えてない」

あお 「(エディーマーフィーっぼく)

じゃあいいよ！！俺を無視してるやつは全員偏差値が低いんだよ！！
ポリスがなんだってんだよ！！」

D J 「彼は雑なエディーマーフィーの吹き替えで虚勢を張り、1人で黙々と
何かをしていました」

あお 「み、見ないでよね、あんたの為に書いてるんじゃないんだからね！！」

青山 「最悪な思い出だ」

同級生 A、入ってきて

同 A 「何書いてんだよ。チクリの青山」

あお 「うるせえ、お前なんて同級生 A じゃねーか」

同 A 「は？千葉ですけど」

あお 「ウソつけよ、日本に千葉なんて慎一しかいねーよ」

同 A 「そんな事ねーよ。ちょっと貸せよ！！」

青山 「最悪だけど、思い出せるだけまだいいよな」

同 A 「うわ、こいつ小説書いてるー！！」

小説のノートを持って逃げる同級生 A

あお 「おい！！返せって、俺の青山君ハンサムモテモテ物語！！
で？俺どうしたんだっけ（青山に）」

青山 「取りに行ったんだろ？」

あお 「あ、そうか。待てーい！」

青山 「間に合わないけどな」

D J 「そうそう」

D J ブースに同級生 A が入ってきて

同 A 「で、俺どうしたんだっけ？」

D J 「校舎の窓から投げたって聞ってるよ？」

同 A 「あ、そうか。とうー！！」

同級生 A、はける

投げた小説ノートが青山の近くに落ちる

青山 「あー、もう……」

青山、小説ノートを手に取り

D J 「この話は今日はこの辺で。続いての曲は……」

ME

高槻杏、入ってきて。

手を出して、青山の持っている小説ノートを取る

青山 「あ」

高槻杏 「青山……君ハンサムモテモテ物語……」

青山 「高槻？」

高槻、小説ノートをカバンに入れて去る

青山 「杏・・・・・・・・」

あおやま、入ってきて

あお 「ねえ、俺の小説見かけなかった？」

青山 「拾われてったよ」

あお 「誰に!？」

青山 「さあ、よく覚えてない」

あお 「んだよ!クソ野郎!役に立たねえな、ゴキブリがよ!」

青山 「言いすぎだろ!」

DJ 「それから一週間後、A君の元にそれが帰ってきた」

たちばな、入って来る

たちばな 「えっほえっほ」

あお 「なんだよ、えっほって、久々に聞いたぞ」

たち 「あ、青山」

あお 「おお」

たち 「えっほ!」

あお 「なんだそれ、あいさつか?えっほ!」

たち 「なにそれ?」

あお 「な、なんなんだよそれ」

たち 「なんか女子が呼んでたぞ。高槻杏」

あお 「高槻?」

たち 「あ、俺の名前は橘!!この高校の野球部のエースだ。
今、地区大会の決勝まで進んでいる。あと一勝で甲子」

あお 「ちょちょちょちょ、なんだなんだお前急に」

たち 「俺さあ、俺の事をもっと知って欲しいんだ」

あお 「知ってるよ」

たち 「俺有名になるぜ」

あお 「もう有名だろ」

たち 「いや、サッカー部の竹内の方が人気あんだよ、あいつまじで、
殺してえよーなんで銃社会じゃないんだよ〜」

あお 「お前が日本人で良かったよ」

たち 「まあ、そんなわけで、俺行くわ、俺は甲子園の出場に向けての練習があるし、
俺エースだから、俺が練習に行かないとはじまらないし、報道記者とかも

来てるし、俺エースだから」
あお 「めっちゃ自分の事言うな」
たち 「じゃあな」
あお 「おう」
たち 「俺さ、エースだから行かないといけないから、俺で勝ってるチームだから、だから俺が行かないと」
あお 「わかったよ、うるせーな黙れよ」
たち 「じゃ、高槻もな」

高槻、出てくる

高槻 「うん、じゃあね」
たち 「俺さあ、エースだろ」
あお 「うるせえ！行け！」
たち 「えっほえっほ」
あお 「で、何？（めっちゃ格好つけて）」
高槻 「あ、これ返しに」
あお 「それ」

ここから青山が話す。あおやま、口ばく。

青山 「読んだの？」
高槻 「うん」
青山 「まじかよ・・・超はずかしいよ！！お願い！」
高槻 「ん？」
青山 「バットで殴らせて！記憶けささせて！」
高槻 「なんで？」
青山 「だってそれ！！」
高槻 「面白かったよ？」
青山 「へ？」
DJ 「面白かった」
青山 「これ？」
高槻 「そう、青山君、将来小説家になるの？」
青山 「お、おう、まあな」
高槻 「そう、楽しみ。また読みたいな、青山君の小説・・・じゃあね」
青山 「あのさあ、なんで俺のってわかったの？」

高槻 「だってその小説の主人公、青山君の名前じゃん」
あお 「そうだった」

高槻、はける

青山 「正直なところ・・・初恋の人のはずなのに、顔なんて覚えてないし」
あお 「あともう一ついい!？」

たかつき（高槻とは別人。大人。）、戻ってくる

たかつき 「うん？」
あお 「君そんな顔だった？」
たか 「うん」
青山 「本当に覚えてない」

たかつき、手を振ってはける

あお 「面白かったかってか」
青山 「そして俺は俺を全力で阻止する」
あお 「俺、決めたぜ、俺の将来は小説」
青山 「(食い気味で) やめとけ!!」
あお 「ああ!? んだてめー」
青山 「てめーに才能なんてあるはずねーだろ!!」
あお 「いや、あるね、言ってたもんね」
青山 「騙されてんだよ、騙されたんだよ俺は」
あお 「いんや、いんや、まじだね」
青山 「目を覚ませよ!!」
あお 「目、覚ましたわ! 目、覚ましたから覚えてんだよ!」
青山 「え？」
あお 「よーし、やったるわあ! 俺、日本一の小説家になったるわあ!!」
青山 「待て!」

青山、あおやまを捕まえるが反対に殴られ、蹴られて逃げられる
あおやま、はける

青山 「ああ!! そうだったあ。俺の馬鹿あ!!」

舞台上、机のところに出版社の男
手には原稿らしきものが入った封筒を持っている

出版社の男 「で、これを持ち込んだと」

青山 「はい」

出版 「で、どうってんの？これ、自分で」

青山 「面白いと思います」

出版 「生まれ直せ！！」

青山 「あれから一度だけ小説を書き、大人なのにポロクソ言われた」

出版 「なにこのタイトル」

青山 「は、初恋」

出版 「恥ずかしい」

青山 「言われてみれば」

出版 「まだゴリラの方がマシな文章書くわ。これ俺にうんこ食わせたのと一緒だからね」

青山 「書き直します」

出版 「どう調理しようがうんこはうんこ、ウンコ以外の何物でもない。才能ない。才能がウンコ、うんこの生まれ変わり、人間の形をしたうんこ」

青山 「じゃあどうすれば」

出版 「あきらめなあ」

青山 「うわあ、恥ずかしい、女の子に褒められて、鵜呑みにして、そのまま、大人になってしまったあ！！なんて事だあ。俺の人生もう取り返しがつかーん！！」

青山、封筒を投げる！！

出版 「おい！窓からゴミ捨てるな！！」

青山 「ゴミじゃない！！俺の傑作だ！！」

出版 「捨てちゃったじゃないか・・・まあ、それでスパッと諦めれるならそれが一番だな。きっと君にはティッシュ配りとかが向いていると思う。さあ、思うさま配りなさい」

出版社の男、青山にティッシュの入った籠を渡し、はける

青山 「そしてその言葉を鵜呑みにした俺は、ティッシュを配って生きている」

あおやま、入ってきて

あお 「見そこなったぜ！俺！」
青山 「しょうがねえだろ、だって俺だぜ？」
あお 「だよなあ、俺だもんな」
青山 「こんな仕事だけど、結構大変なんだ」
あお 「そうなんだ」
青山 「ティッシュいる？」
あお 「うん」

あおやま、籠ごと取る

青山 「籠ごとかよ」
あお 「だって俺めっちゃオナニーすんもん」
青山 「高校生だもんな」

SE チャイム

一気に明りが無くなり。ノートパソコンの明かりだけになる
もう一度チャイムが鳴る

青山 「午前四時半、夜中終了中、チャイムの音で朝が来る」

もう一度チャイム

青山 「なんで昔の事なんか思い出したんだろ？」
DJ (NA) 「それでは今夜はこの辺で、お相手はDJ タッキーでした」

青山、ヘッドフォンに繋がっているコンポのボタンに指をかける
もう一度チャイムが鳴る
青山、ボタンを押す。CDが回る音。

ME 783kHz/one cake size feathers

オープニング映像 舞台のあちこちに映し出される文字を、登場人物が出てきては
動かしていく